

# 読書

## 読んで オカルト

「モラルの起源」 亀田達也著

「理性の起源」 網谷祐一著



「理性の起源」と「モラルの起源」

モラル(倫理や道徳の基準)というものは、唯一の正解を示すことができない。現代では「われらのモラル」は「彼らのモラル」としばしば食い違い、衝突を生む。

こんな時代にモラルを問いただすお手本のような姿勢を見た。亀田達也「モラルの起源」(岩波新書・821円)は、人間が血縁者や仲間の利益だけを考えていればよかった時代から現在までを振り返り、「仲間うち」を超えたこれからのモラルを模索する。

モラルが衝突しあっても、互いに人間であるかぎり共通の基盤はある。社会性や利他的行動、情動的共感、利益分

## これからの道徳観模索

配など「をめぐり、実験を通じてその「共通基盤」を発見しようというのが本書。脳科学や進化生物学など理系の研究と、社会学や心理学など文系の研究を総合したところに、新しい地平が見えてくる。

現在、文部科学省主導で進められている、文系学部的大幅な縮小。文化の底を支える絶大な力を持ちながら直接に金銭的利益を生まない文系学部は、国力に貢献しないと言いたいのだろう。それに対して「人間の知は、文系理系の手柄争いによって進歩しない。知は総合すべし」という力強い解答が示された気がする。胸にしみた。

感動の余韻で「人間はいつ(どんな条件をそなえたときに)人間になったのか」をもっと知りたくなり、網谷祐一「理性の起源」(河出ブックス・1836円)も手にとった。理性を進化の問題としてとらえ、「そもそも理性とは何か」「いつ発生したか」「進化のうえで有利になる条件だったのか」といった問いを重ね、人間の本质を問う。

小気味よい語りのような文体が、哲学的問題をほりほり噛み砕いて進む。シャープな章立てと冴えたまとめで「理解できた実感」を与えてくれる快著だ。

(渡邊十絲子・詩人)

